



昔むかし、あるところに、ひとりのお父さんがいました。

ある日、お父さんは、豆のいっぱい入ったざるをひっくり返してしまいました。お父さんは、こぼれた豆を拾って拾って、やっと拾いあつめました。ところが、ひと粒つぶだけ拾いわすれてしまいました。

ひと粒の豆は芽めを出して、つるが長いすまでとどきました。奥おくさんがそれを見つけて、「お父さん、お父さん。長いすをふたつに割わってくださいな」といいました。おとうさんは、長いすをふたつに割りました。すると、豆のつるは、割れた長いすのあいだからどんどのびて、天井までとどきました。奥さんが、

「お父さん、お父さん。天井をふたつに割ってくださいな」といいました。お父さんは、天井をふたつに割りました。豆のつるは、割れた天井のあいだからどんどのびて、屋根までとどきました。

「お父さん、お父さん。屋根をふたつに割ってくださいな」
お父さんは、屋根をふたつに割りました。豆のつるは、どんどん、どんどん大きくなって、どんどのびて、天までとどきました。

「お父さん、お父さん。天をふたつに割るように、神さまにお願いしてくださいな」
お父さんは、神さまにお願いしました。すると神さまは天をふたつに割ってくれました。豆のつるは、どんどん、どんどん大きくなって、天の中までのびていきました。

「お父さん、お父さん。天によじ登って、神さまに会いにいきましょうよ」
お父さんは、豆のつるをよじ登っていきました。奥さんがあとにつづきました。ふたりは、登って登って登って、とうとう天につきました。

神さまは、ふたりを案内あんないして、天をあちこち見せてくれました。
夜になると、奥さんが神さまにいいました。

「神さま、神さま。あたしたち、どこで寝ねたらいいでしょう」
「かまどの上で寝なさい。でも、私のごたまぜ料理りょうりを食べるんじゃないよ」と、神さまはいいました。お父さんと奥さんはかまどの上に横になりました。

しばらくすると、奥さんがいいました。

「お父さん、お父さん。神さまのごたまぜ料理、食べてみましょうよ」

お父さんは、ちょっと食べました。奥さんもちょっと食べました。すると、あつというまにごたまぜ料理はお鉢はちから流れおちて、ぜんぶこぼれてしまいました。

朝になって、神さまがやってきて、お鉢が空っぽになっているのを見ました。

「おまえたち、私のごたまぜ料理を食べてしまったな。わたしの食べるものがなくなってしまったではないか。天からたち去るんだ」

お父さんと奥さんは、一生けんめいあやまりました。すると、神さまはふたりをゆるしてくれました。

夜になると、奥さんがいいました。

「神さま、神さま。あたしたち、どこで寝たらいいでしょう」

「納屋なやへ行って、干し草ほの上で寝なさい。でも、私の馬車を乗りまわすんじゃないよ」

お父さんと奥さんは、納屋へ行って、干し草の上に横になりました。奥さんがいいました。

「お父さん、お父さん。神さまの馬車、ちよつぱりでいいから乗ってみましょうよ」

「おいおい、だめだよ。神さまに天から追いだされてしまうよ」と、お父さんはいいました。けれども、奥さんは、馬車に乗りこんで、そこらへんを乗りまわしはじめました。

馬車は飛んとでいって、どうやっても止まらなくなり、こわれてばらばらになるまで走りまわりました。

朝になって、神さまがやってきて、馬車がばらばらにこわれているのを見ました。

「おまえたち、きのうは私のごたまぜ料理を食べてしまうし、きょうは、わたしの馬車をこわしてしまった。さつさと天からたち去るんだ」

お父さんと奥さんは、また一生けんめいあやまりました。すると、神さまは、

「ゆるしてやるのも、これがさいごだぞ」といいました。

夜になると、奥さんがいいました。

「神さま、神さま。あたしたち、どこで寝たらいいでしょう」

「果物畑くだものばたけへ行きなさい。でも、わたしのりんごりんごを食べるんじゃないよ」

お父さんと奥さんは、果物畑へ行って横になりました。奥さんがいいました。

「お父さん、お父さん。神さまのりんご、ほんのひと口でいいから食べてみましょうよ」ところが、奥さんがひと口食べるか食べないうちに、りんごはぜんぶ下に落ちてしまいました。お父さんはびっくりして、奥さんの髪かみの毛を引きぬいて、りんごをひとつひとつ

つ木に結びつけていきました。でも、奥さんの髪の毛をぜんぶ引きぬいても、たくさんのりんごをぜんぶ木に結びつけることはできませんでした。

朝になって、神さまがやってきて、りんごがまき散らされているのを見ました。神さまは、おこりました。

「おまえたち、天からたち去るんだ。もうゆるしてはやれん。ごたまぜ料理はたいらげる、馬車はこわす、きょうは、わたしのりんごをまき散らしてしまった。さあ、大麦のぎでなわを一本ないなさい。そのなわをつたって帰るんだよ。お父さん、おまえは奥さんをふくろに入れて、そのふくろを口にくわえて地上に運びおろすんだ。とちゅうで、奥さんになにをきかれても答えてはいけないよ。ふくろが下に落ちてしまうからな」

お父さんと奥さんは、なわをないました。それから、お父さんは、奥さんをふくろに入れて、ふくろを口にくわえ、なわをつたって下りていきました。下りていくあいだじゅうずっと、奥さんは、ふくろのなかから、

「お父さん、お父さん。もう半分まで来たかしら。もう半分まで来たかしら」とききました。お父さんは、ずっとだまっていました。

ちようど半分まで下りてきたとき、奥さんが、また、

「お父さん、お父さん、もう半分まで来たかしら」とききました。お父さんは、思わず、「半分だよ、もう半分まで来たよ」といってしまいました。そのとたん、ふくろは下へ落ちていきました。

お父さんは、地上に下りると、奥さんをさがしましたが、どこにも見つかりませんでした。

それからというもの、お父さんはひとりでくらししました。でも、そのほうがずっとよかったですよ。

のぎ…稲、麦などの実の殻にある針状の毛。

原話…『世界の民話33リトニア』

虎頭恵美子訳／ぎょうせい

再話…村上郁

